

異世界転生したのは世界のVIP
達から認められた料理屋の店主

北方守護

これは命を落とした者が違う世界で生きる物語です。

目次

	主人公の物語設定。	1
第1話	転生の間	7
第2話	廃村	13
第3話	水	21
第4話	第一村人？	27
第5話	チートの一端	33
第6話	新たな村人	41
第7話	驚き	49
第8話	壊れた常識？	55
第9話	風呂作り（前編）	61
第10話	新入りの村民	67

第11話 つまみ食い

第12話 風呂作り（後編）

第13話 入浴

第14話 2人目の住民

第15話 主食探し。

主人公&物語設定。

これは作者の自己満足で作った作品です。

主人公&世界観設定。

主人公設定。

遠野武昭（とおの たけあき）享年38歳。

身長186cm 体重79kg 黒眼黒髪で細フレームの銀縁眼鏡を掛けていた。

実家は江戸時代から続く寿司屋で祖父母がやっている。

両親は中華料理店を営んでいる。

高校卒業と同時にフランスに渡り3年後には三つ星レストランで調理長を任せられる。

それから2年後には帰国して自分の店を出す。

その後、サミットでの調理責任者や海外セレブ達が来日した際の食事を担当した

りしていた。

得意料理はこれと言って無いがフグの免許やうなぎなどの特別な調理が必要な物を捌く事が出来る。

ある日、仕入れを終えて店に戻る時に居眠り運転のトラックが道路の中央線を越えてきたのを避けられず、そのまま事故に巻き込まれる。

実は店の常連の中に神が来ていて、事故を知って転生させた。

世界観設定。

転生した世界はグダザという国。

色々な種族と一緒に生活している。

魔法がいたり魔法やスキルの概念がある。

地球の食材と見た目が同じ物があるが魔物の肉なども食べたりする。

調味料はあるが、それなりに高い。

例

砂糖 1 kg 青銅貨 2 ～ 3 枚。他の調味料も同じ位の値段だが産地では安い場

3 主人公&物語設定。

合もある。

一般市民は月に銀貨5〜8枚で生活出来る。

貨幣は木貨 鉄貨 銅貨 青銅貨 銀貨 金貨の順に上がっていく。

地球の価値にすると

木貨 ≡ 1円

鉄貨 ≡ 10円

銅貨 ≡ 100円

青銅貨 ≡ 1000円

銀貨 ≡ 10000円

金貨 ≡ 10万円

それぞれ10枚で両替出来る。

1年は16ヶ月 1月は35日 1日は20時間で四季がある。

太陽は1つだが、月は赤い月、青い月、黄色い月の3つが代わる代わる出ていく。

奴隷などもいるが大体が借金や犯罪を起こした関係でなっている。

武昭の能力。

魔法

炎魔法、水魔法、風魔法、土魔法、氷魔法、雷魔法が使えるが全てレベル1。
レベルは1から10までの段階がありレベル10の魔法が使える者は世界でも数える程しかない。

ちなみにレベル1は魔力があるなら誰でも使えると言われている基本魔法。

スキル

【鑑定】かんでいあらゆるものの全てを見る事が出来て鑑定した物の上に浮かび上がる。

人物なら名前や年齢、種族や職業に使用可能魔法やスキルに職業が出来るが女性だけで言うとスリーサイズも分かるが、見たくない情報などは見ない事も出来る。

【百科事典】ダイクシヨナリ

頭の中に動植物などの群生地がどこにあるか分かったり、葉などの作成法が浮かんでくる。

例

回復葉 ボーション

10gのヒール草を刻んで60℃のお湯に入れて30分かき混ぜ続けて全て溶けたら冷まして完成。

【計測】スケール

測りたい物を見るだけで長さや重さ、温度が分かる。

【方向探知】コンパス

行きたい方向を考えたり言ったりすると、その方角の矢印が見える。

(武昭のみにしか見えない)

【地図作成】マップペン

頭の中に近辺の地理などが浮かび上がる。

かるよ》

善が手をかざすと鏡の様な物が現れ、その鏡面には彼の葬式の場面が映し出されていた。

「なっ!?……嘘だろ……そうだ……段々思い出して来た……俺は仕入れを終えて帰る時に……オエー!?」

《だめだ!それを思い出してはダメなんだ!!》

善は彼が死ぬ瞬間を思い出し青い顔をして嘔吐したのを止めた。

《大丈夫かい?……本来なら命を落とした者は自分が亡くなった時の事を思い出す事が無いんだ》

「無いんだって……けど、俺は今、ウッ!……」

《済まない……それは、こちらの方の責任だ……》

善は事情を説明した。

それによると善が店に行こうとした時に何らかの歪みを感じたので元の世界に戻った所人間の魂を管理する者が失態を起こし、幾人かの人間が本来の寿命では無いのに命を落としたとの事だった。

「じゃあ……俺がここに居るのは……」

《ああ、こちらの方の不手際なんだ……申し訳なかった!》

「ああー善さん、そんな事を言われてもこっちからしたらどうなるかだけ教えて欲しいんだけど?」

《何だい? 僕に怒ったりしないのか?》

土下座していた善は彼の言葉にキョトンとしながら顔を上げた。

「うーん……普通なら怒る所なんだろうけど……それをしたからって元の世界に帰れるって訳でもないだろ?」

《そうだな、あの世界においてアンタの存在はもう無いからな……》

「それに、ここに善さんが居るって事はアンタが何かをするんじゃないかって思ってるんだけど」

《なるほど、そう考えていたのか、そうだ君はあそことは違う世界で新たに生きてほしいんだ》

「ん? 新たな世界って……そんな事出来るのか?」

《ああ、これでも僕は幾つの世界を管理してるんだよ、その中の世界の1つに

転生してもらおう》

「転生か……そこはどんな世界なんだ？」

《分かりやすく言うとき代的には君の世界でいう所の中世の欧州の様な感じだね》
「なるほど……それでこっちの世界との違いとかはあるのか？」

《ああ、その世界は科学の代わりに魔法が発展していて人間とは違う存在も普通に住んでたりするんだ》

「人間とは違う存在って……エルフとかドワーフとかって事か？」

《そうだ、他にも獣人や魔物もいるな……それと、その世界じゃ調理技術がそんなに発展してないんだ……

だから、君には向こうで色々な調理技術を広めてほしいんだ》

「発展してないって、どんな感じなんだ？」

《肉や魚は焼くか煮る、野菜類なんかも生か茹でたりするだけって所だ》

「そんな世界で俺が色々やっても良いのか？」

《ああ、その世界の者達は、色々な食材があってもさっき言った事位しか出来ないんだ……だから、君がその者達に新たな事を教えてほしいんだけど……》

「善さん……ああ、分かったよ一度落とした命だこんな俺に何が出来るか分からないけどやれる事をやってみるよ」

《ありがとう！ それじゃ君を転生させる前にこちらから特典をあげるよ》

善が手をかざすと光り輝くモノクル状の物と辞典程の厚さの本と銀色の定規、それと黒い方位磁針が球状になって彼の体に入り込んだ。

《それらは、君に与えた能力を具現化した物でね、その世界で必ず役立つ筈だよそろそろ時間だね》

善がそう言うのと彼の体が輝いて足元から薄くなっていった。

《向こうの世界に行っても……元気で過ごしてくれ》

「ああ、善さんも暇があったら来てくれよ、それじゃあな」

彼がそう言うのと体が全て消えて、その空間には善だけが残った。

《彼の魂に幸いあれ……おい姿を見せろ》

雰囲気の変わった善がそう言うのと白いローブを纏った男性が現れた。

《お前は何をしたか……分かってるのか？》

《は、はい……私のミスにより本来なら死ぬべきでは無い者達を死なしてしまい

ました……申し訳ございません!!》

男性は震えながら善に土下座した。

《お前が謝っても何も戻らないんだよ……それよりもアレは用意出来たのか?》

《は、はい!こちらにあります!!》

男性は懐から3つの光の球を取り出すと善に渡した。

《本当なら、これも彼に授けたかったんだけどな……まあ、あっちの生活に慣れた頃に渡すとするか……おい、お前はもう戻れ》

《は、はい!分かりました!全能神様》

男性は頭を下げると善の前から姿を消し、それを見た善も姿を消した。

第2話 廃村

主人公のスキルに幾つか加えました。

詳しくは設定を見てください。

光が眩しくて目を閉じていた武昭が目を開けると何処かの山中だった。

「ん……どうやら、ここが善さんの言ってた世界みたいだな……けど、なんで、こんな山の中なんだ？」

「おお、どうやら転生したみたいだな」

「うわっ!? 善さんの声がするぞ! けどどこにいるんだ? ……」

「僕は今、元の世界から君の頭に直接話しかけているんだ」

「そうなんだ、それで、ここはどこなんだ？」

「そこは泊場で説明した僕が管理する世界グダザの中の大陸の1つなんだ。以前は色々な人種達が住んでいたんだけど、ちょっととした事情があって、極少数の者達

しか住んでいないんだ……」

「その、ちょっとした事情ってなんだ？」

「まあ……簡単に言うとは戦争だよ……」

「そうか……なら、それ以上は聞かないよ……それで、俺はこれからどうするんだ？」

「今、君のいる場所から南西に以前は村があった土地がある、そこに行くと良いね」

「南西か……ってどっちだ？」

武昭が周りを見ると木々が生い茂っていた。

「そんな時に僕が与えた特典、【地図作成】と【方向探知】の出番だね。頭の中で行きたい方向と場所を考えるんだ」

「行きたい方向と場所……（南西の村の跡地は……っと）うおっ!? 頭の中に何かの映像と目の前に矢印が見えてるぞ」

「その通りに行く」と目的地に行けるよ……僕は、少しやる事があるから到着したら呼んでくれ、それじゃ」

「あ！ 善さん……まあ、聞いた通りに行きますか……」

武昭は善の指示を聞いて矢印が示す方向に向かった。

武昭が指示された位置に到着すると、そこは荒れ果てた村の跡地だった。

「ここが善さんの言った場所か……本当にボロボロだな……おっと家の壁も……」
武昭が近くにあった家に入ろうとした時に触った場所が軽く崩れた。

「以前はここにも多数の者達が住んでいたんだけどね……」

「まあ、何があったかは聞かないよ……それよりも草木が生い茂って凄いな……」

「そうだね、けどこんな場所でも武昭なら問題なく暮らす事が出来るよ。僕がその為の力を与えたんだからね」

「そうなんだじゃあまずはグウ……飯の用意だな……けど、周りにあるのは草だけだな」

「なら、周りの草木に【鑑定】を掛けてみると良い」

「そっか、じゃあ【鑑定】おっ、なるほど、こんな感じなんだ」

武昭が見た足元の草の上にゲーム等で見るメッセーモニターのような物が浮かび、こう書かれていた。

「ドローガ」

葉草の一種。あらゆる場所に生息しており、その場所によって効果が変わる。

清らかな水や大地の場所なら強力だが、何もされてない場所では普通。

この場所のドローガは野生種に近い為、そんじょそこらの物とは効果が段違いに強い。」

「ふーん葉草の一種なんだ……そうだ【百科事典】うわっ！周りの草の殆どがドローガじゃないか」

武昭が言うに見える所が大体青くなっていた。

「おお、僕が言わなくても特典を使う事にしたんだね」

「ああ、善さんに頼ってばかりじゃダメだから……それにしても、なんか色が違う草があるけど【鑑定】」

「ヒール草

葉草の一種。ドローガの群生地の中に時たま生えている事がある。

そのままでは何も効果が無いが、これを材料としてポーションを作成出来る。」

「なるほど、まあ一応取っておくか……保管場所は、よしあそこの家にするか」

武昭はドローガとヒール草を幾つか収穫すると中でも傷みが少ない家に置き始め

た。

暫くして武昭は村の周りを見ていた。

「うーん、何か調理器具があれば良かったんだけど……ボロボロだな」

武昭が家々を回って物資を探すが使えない物が多かった。

「だったら魔法を使ってみたら、どうだい？」

「ん？魔法って……俺が使えるのか？」

「ああ、転生させる時に僕が与えたんだ、その世界ではあると便利だからね」

「そうなんだ……って、どうやるんだ？」

「そうか、武昭の世界には無かったんだね、簡単だよ頭の中でやりたい事をイメージしてみるんだ」

「イメージ……じゃあ喉が渴いたから……【水よ】うわっ!!」

武昭が右手を前に翳して考えた呪文を唱えると多量の水が出て来た。

「うん、ちゃんと使える様だね、じゃあそのまま勢いを弱めるイメージをしてみるんだ」

「ああ……ふう、これ位なら普通に飲めるか……プハァ！美味しい水だぜ!!」

「そうだ魔法はイメージだから武昭がこうしたいって考えると色々やる事が出来るよ」

「イメージか……ん？　そういや俺が使える魔法と違ってどうやって知るんだ？」

「それは【ステータス】と言えば画面が浮かぶよ」

「本当にゲームみたいだな、じゃあ【ステータス】　ふーん、これが俺のステータスカ……ん？」

武昭が出したステータスにはこう記されていた。

【タケアキ・トオノ半神半人年齢25

職業調理師農家漁師ハンター

スキル 【鑑定】 【百科事典】 【計測】 【方向探知】 【地図作成】

魔法炎魔法水魔法風魔法土魔法氷魔法雷魔法

テクニック解体修復裁縫狙撃建築】

「なあ善さん、職業の農家、漁師にハンターそれにテクニックってあるんだけど……」

「ああ、その説明を忘れてたね、職業の調理師以外はあれば武昭が便利だと考えて与えたんだそれに年齢が若くなってる事に気付いただろうけど、その方が都合

が良いと思っただ」

「確かに料理をする俺からしたら良いけど……」

「それとテクニクは武昭自身が元の世界で習っていた技術なんだけど心当たりあるかい？」

「心当たり……あつ、爺さんや婆さん、叔父さんに習った覚えがあるな……」

「そうだったんだ……家族の絆って物だね……まあ、良いじゃないか……」

「ああ、けどテクニクに修復があるって事は……うん、直し方は分かったけど材料が無いか」

武昭は壊れた家を直そうとしたが頭の中でどう直すか分かっただけだった。

「テクニクは、それが出来るが出来ないかであって、する事はまた別だからねおっと、そろそろ僕が手助け出来るのも終わりだね」

「そうか……善さん、ありがとうな、俺なんかの為に、ここまでやってくれて」

「気にしなくて良いよ、僕がやりたかった事でもあったからさ……それじゃ善の声が聞こえなくなったが武昭は感謝していた。

説明

職業

その者に適した職業。時に複数持つ者がいる。

テクニク

そのの持ち主が生きて来た中で習った技術。

小さい時から彫刻をしていれば【彫刻】のテクニクを身につけられる。

但し、テクニクは職業やスキルとは違い誰でも身につけられるが続けなければ消滅する事がある。

ちなみにテクニクを見れるのは、この世界では武昭だけ。

第3話 水

善の手助けが終わった武昭は自分が何が出来るか考えていた。

「今、ここにあるのはドロローガとヒール草だけか……出来れば何か蛋白質があれば……あ、そうだ【方向探知】」

「

武昭が何かを思い付いてスキルを発動させると矢印が浮かんだ。

「おお、何か蛋白質が無いかやってみただけど上手くいったな……じゃあ行ってみるか」

武昭は目的の場所に向かった。

暫く歩くと山中に流れている川を見つけた。

「まあ、山で蛋白質って言ったら魚になるよな……それにしても綺麗な水だな【鑑定】」

「ゴランド山から流れてくる川の水。」

「清らかな水で飲んでも平気。」

「飲んでも平気か……ゴランド山って……ああ、あれの事か」

武昭は川の上流を見て山がある事を確認した。

「とりあえずは魚をどう取るかだけ……おっ、さすが漁師の職業って所だな」

武昭が川に入って魚を確認すると簡単に手掴みで取れた。

その皮は白く所々に黒い斑点があった。

暫く経って魚がある程度取った武昭は村の跡地に戻って食事の用意をしていた。

「まずは【鑑定】」

「ノワルフイツシュ 清らかな水の川に生息する川魚。

身は淡白で味は美味しい。料理法としては焼く事がおススメ」

「うん当たり前の感じだな……じゃあ魚の処理をしますか……って何か刃物の代わりになる様な物は……あ、そうだ」

武昭は何かを思い付いた。

「土魔法があったから……まずは【形成】そして【焼成】……うん、とりあえずはいい感じで出来たな」

武昭は土魔法と炎魔法を駆使してセラミック製の包丁を作った。

「これが出来たって事は……うん思った通りだ」

武昭は続けて鍋と食器を作り出した。

「よし、これで薬草と魚の煮込みが出来るな……あとは調味料を探るか【百科事典】

【方向探知】【地図作成】

「どうやら向こうの方に塩があるみたいだな……おっ、これみたいだな岩塩か【鑑定】」

「ゴランド山の岩塩時たま山で採取出来る岩塩。

色々なミネラル分が含まれていて美味しい塩。」

「確かに俺が店で使っていた塩と似た味だな、さてと料理を開始するか」

武昭は土魔法でカマドを作ると料理を作り始めた。

その後……

「よし、スープと焼き魚が出来たか……んじゃいただきます」

武昭は自分が作った料理を食べ始めた。

「うん、初めて見た材料で作ったにしては上手く出来たな……ふう、ご馳走さん」
料理を食べ終えた武昭は少し休むと村をどうするか考え始めた。

「ゴランド山から流れってくる川の水を村の近くに引き込むとなると……【計測】うん、結構な距離だな」

武昭が川から村までの距離を見ると元の世界換算で2 kmと出ていた。

「元の世界なら何らかの機械や重機があったから良いけど、今は俺1人だからな……
そうだ【地図作成】と【計測】を同時に……」

何かを思い付いた武昭が考えた事をする^と頭の中の地図に青い線が浮かび上がった。

「やっぱり2つのスキルを発動出来るかやってみただけ……出来るもんだな……
だとしたら……」

武昭は色々と思い付くと実践してみた。

その結果……

「うん……これなら雨風も凌げるだろ」

武昭の目の前には土魔法と炎魔法で作り出した四角い箱型の家があった。

「包丁や鍋とかも作れたんだから家も出来ると思ったけど、出来るもんだな……」

「あとは……そうだ【疾風烈弾】^{しっふうれつだん}からの【激流水】^{げきりゅうすい}」

武昭は村の周りに風魔法で深めの穴を掘り、その中に水魔法で水を流し入れると水堀を作った。

「元の世界で見た忍者漫画に載ってた事をやってみただけど上手く行って良かったな」
「本当なら防壁があればもっと良いんだけど今は、これ位か……そうだ【百科事典】……うん、この近くにあるみたいだな」

武昭は何かを探す為に村を出た。

ちなみに武昭の魔力はこの世界でレベル10の魔法を使う人からすると数十倍あります。

第4話 第一村人？

ちなみに武昭の服装は長袖のシャツにノースリーブベスト、茶色いチノパンです。

村を出た武昭が向かったのは川があった方とは逆方向だった。

暫く歩いた武昭は目的地に到着した。

そこは緑色で節のある植物が沢山生えており……

「やっぱり、この世界にもあるんだな。一応【鑑定】」

武昭が探していたのは元の世界で言う【竹】だった。

「オネスバブ元の世界で言う竹と同じ物。」

その強度は硬いが弾力が適度にある。

そして若竹は燃えにくいが枯竹は火がつきやすい。

時期によっては筍が生えており採りたては生でも食用可能。」

「ふうん、おお触ると硬さを感じるけど何処と無く柔さもあるな……【風刃】とりあ

えずは10本程切れたか」

武昭が手を翳して魔法を唱えるとオネスバブが何本か切断されたので何回も行き多数の束が出来た。

「うん切り口も綺麗だな……けど、どうやって持って行こうか……ガサガサん？

」(1)

武昭がどうするか考えてると竹やぶの中から虎に似た生き物が出て来た。

「うおっ!? そーいや虎の模様は竹林に紛れる為の物だったな!!……あれ?」

武昭は虎から距離を取ったが虎は所々傷ついていて、そのまま気絶した。

「どうやら何かと争って傷付いたみたいだな……【鑑定】」

「ヴェルディーガー

原生生物の一種。竹林に棲まう虎の仲間。

性格は凶暴。毛皮や牙は高級品で武器や防具の材料にされる事がある。」

「凶暴な性格でも傷付いてる奴を黙って見てられないよな……おっあった」

武昭は懐からドロガを出すのと近くの土で小型の乳鉢を作りすり潰した物を虎の傷に塗った。

「野生動物だから変に治療するより簡単な処置で良いだろう……」

〈ガァァァ……?〉(2)

武昭が虎の治療をしてると虎が目を覚ましたが軽く混乱しているみただった。「おっ、気が付いたか。ちょっと休めば傷も治るだろうから休んでろ、じゃあなん？」

武昭が竹を担いで、その場を去ろうとした時、虎が服の袖を噛んでいた。

「どうした？俺と一緒にいたいのか？」

〈ガァ〉

「けどな……俺はこことは違う場所に家があつてな、これを持って帰らなきゃダメなんだよ」

武昭は竹の束を指した。

〈グルル……ガァ〉

悲しそうな声を出した虎は何かを思い付くと袖を引っ張って竹の所に連れて行った。

「どうした？竹をどうかしたいのか？」

〈ガァ！〉（3）

虎は竹の近くに伏せた。

「うーん……あっ、もしかして、この束を運んでくれるのか？」

〈ガァ！〉

「けどな……結構な量、あるんだぞ？大丈夫か？」

〈グワァァァ！〉

虎が大声を上げると体の大きさが3倍程に巨大化した。

「へえ、そんな力を持ったのかじゃあ背中に載せるからしゃがんでくれ」

〈ガァ！〉

虎は武昭の指示通りにしゃがんだので、武昭は背中に竹を落とさない様に括り付けた。

「よし、これで大丈夫だな……じゃあ俺の後について来てくれ」

〈ガァ！〉

武昭が言うと虎は嬉しそうについていった。

その時の虎の心中。

初対面時 (1)

くっ……まさか、こんな所に人間がいたとは……これで私も……

気が付いて (2)

私はまだ……なっ!?!なぜ、この者は私の治療を……?

この者は私が今まで見てきた人間とは違うみたいだ……

帰宅時 (3)

なっ! 私はこの者に助けられのた、ならば恩を返さなければ!

ふん、こんな物など私にとつては物の数ではない!

まさか、私の力を見ても怯えぬとは……決めたぞ、私はこの者のそばにいよう……

第5話 チートの一端

武昭は虎と一緒に村に戻ってきた。

「さてと、悪いけど竹をあそこの近くまで運んでくれるか？」

〔ガァ〕

虎は武昭の指示を受けて一緒に向かった。

「ちょっと竹が長かったか……仕方ない【風刃】」

武昭は虎から竹の背中から竹を降ろすと置く場所のサイズに切り分けた。

「よし、竹はこれで良いから……魚でも捕まえてくるか……お前も着いてくるか？」

┌

〔ガァッ！〕（1）

「そうだ、お前って言うのも何だな……目の色が緑色だから【ラルド】だよろしくなラルド」

〔グワァ！〕

名前を付けられたラルドは武昭に甘えていた。

武昭とラルドは以前に魚を取った川に到着した。

「ラルド、俺はここで魚を取ってるから呼んだら戻ってくるんだぞ？分かったか？」

〔グルルガァッ！〕（2）

武昭はラルドが森に向かったのを確認すると魚を取り始めた。

しばらくして……

「うん、ラルドもいるからこれ位で良いだろ……じゃあ戻るかおーいラルドー帰るぞー」

〔ガァ……〕

呼ばれたラルドが戻ってきたがその口には頭にツノの生えた猪を啜えていた。

「ん？それってラルドが捕まえた奴なのか？」

〔ガァ！〕

「もしかして、これって俺の為に取ってきてくれたのか？」

ラルドが猪を差し出したので武昭が事情を聞くと嬉しそうにうなづいた。

「そうか、ありがとうなラルド、じゃあ帰るぞ。ラルド背中に猪と魚を載せたいから大きくなってくれるか？」

〔ガァッ！〕

ラルドは武昭の指示を聞いて大きくなったので武昭は背中に猪と魚を載せて村に戻った。

村に戻った武昭は猪の処理を始めようしていた。

「とりあえずは【鑑定】」

〔ラトローボア

原生生物の一種。山中に生息する猪の一種。

性格は凶暴。牙やツノは武器の材料、毛皮は衣服の材料となる。

肉は美味しいが、その凶暴さから高級品の食材となっている。」

「なるほど、肉は食えるのかそれに捨てる所も少ないみたいだしな……まずは血抜きからするか、ラルド」

〔グワァ？〕（3）

「悪いが、この猪を木から下げたいからこれを持ってそこの枝に上がってくれ」

武昭は蔓草で作ったロープをラルドに渡すと枝の上から下ろす様にした。

「あとは、これを上に吊るして……っとよし準備完了」

武昭の前には後ろ足から吊るされた猪がぶら下がっていた。

「本来ならアレがあれば解体しやすいんだけど無い物強請りをしてもしようがないか《ガチャッ》ん？」

武昭が猪を解体しようとした時に音がしたので見ると何処か見覚えのあるちよつと大きなアタツシユケースがあった。

「もしかして、コレって……おお、俺が使ってた包丁セットに解体道具一式じゃねえか！何でここに？……ん？手紙だ……」

武昭がケースの中を確認してみると一通の手紙が置いてあったので見ると善からで

あり、こう書いてあった。

【武昭がコレを読んでもという事はちゃんと武昭の元に届いたという事だな。

まあ、詳しい事はこちらからのお詫びって事で納得してほしい。

それで、その道具類に関してだけど、それは我々の世界で新しく作り直した物なんだ。

鍛冶の神が、その道具類に込められた思いを聞きとってね、それで武昭の所に送ったんだ。

それらを使って美味しい物を作って欲しい。それじゃ

武昭が読み終わると手紙が自然に消えた。

「そうだったんだ……よろしくなお前たち」

武昭が道具類に言葉をかけると軽く発光した。

「じゃあ、始めるか……おお、凄い切れ味だな……」

武昭は解体用のナイフで猪の解体を始めたが、その切れ味に驚いていた。

しばらくして猪の解体を終えた武昭は軽く後始末をしていた。

「ふう、とりあえずはこんな所だな……あとは、この内臓と骨をどうするかな……」

「ガァ！」

「ん？もしかしてラルド、この内臓と骨を食べたいのか？」

「ガァッ！」

「そうか、ラルドが食べるなら食べて良いぞ、それとコレも食え」

武昭は猪の肉の後ろ足の一本をラルドに渡したがラルドはキョトンとした顔になっていた。

「俺にはこれだけの量は多すぎてな、悪くなっても勿体ないし、それに俺とラルドは仲間だろ？」

「グルル……ガァッ！」

武昭から頭を撫でられたラルドは嬉しそうな声を上げると武昭の顔を舐め始めた。

「おいおい、痛いから余り舐めるなよ。俺は自分の飯を作るからラルドは食べてて良いぞ」

武昭はラルドから離れると料理を開始した。

虎↓ラルドの心中。

(1)

私は恩人のそばに居る！

よし！今日から私の名前はラルドだ！

(2)

分かりました……主があるじそういうのなら……ならばこのラルド！主の為に獲物を獲ってきましょう！

ケガをしていようが猪ごときに負ける私ではない！

(3)

おお、さすが私の主だ、あの大きさの猪を物ともせず、ああするとは……
まさか主が私の為に肉を分けてくれるとは……

第6話 新たな村人

武昭がグダザに転生してから2ヶ月ほど経った頃……

武昭は竹で家の壁などを補強していた。

「おいラルド、もう少しそっちに引っ張ってくれ」

〔ガウ〕グッグッ

「よし、そこで引っ張るのを止めて、少しそのままだ……これで良しと離して良
いぞ」

〔グワァ〕

「ふう、大分家の修理も終わってきたな……そろそろ竹も取りに行かないとな……
ラルド行くか？」

〔ガァッ！〕（1）

武昭が言うラルドが嬉しそうに言ったので一緒に竹を取りに向かった。

竹を取って帰る途中、武昭は木になっている果実を見つけた。

「ん？これって……何か見た事あるけど……【鑑定】

「マトマ 原生植物の一種。

元の世界で言うトマトと同じ物。

種を植えて育てる事が可能。」

「ふーんとマトと一緒に事か……なら幾つか収穫して行くか……ん？向こうにも何かあるな【鑑定】

「デイラッシュ 原生植物の一種。

元の世界で言う大根と同じ物。

葉を残して植えると又生えてくる。」

「大根もあったのか……ついでに取って行くか、ん？ラルドー何処に行ったー？」

「ガァッ!!」(2)

武昭が帰ろうとするとラルドがいなかったので呼び掛けると少し離れた場所から聞こえた。

「どうしたんだ？ラルドって……怪我人か……けど、コレは……」

武昭がラルドのいる場所に向かうと茶色の短髪で頭に動物の耳が生えている少女が傷だらけで倒れていた。

「息はあるみたいだけど傷が多いな……ラルド、この子を載せてくれるか？」

〔グワァァァ!!〕

武昭の指示を聞いたラルドがいつもより大きくなったので武昭は少女と一緒に乗り込んだ。

「ラルド、出来るだけ早く走ってくれ、この子は俺が抑える」

ラルドは黙ってうなづく、その場から駆け出した。

村に戻った武昭は少女をベッドに寝かすと治療を開始した。

「とりあえずは【鑑定】」

〔××××茶犬族獣人。〕

容体多数の切り傷。右足の捻挫。軽い空腹。

命に関わる様な傷ではない。」

「どうやら、そんなに慌てる事も無いみたいだけど、いつ目を覚ましても良い様にしておくかラルド起きるまでこの子のそばにいてくれ」

〔ガァ……〕（3）

武昭はラルドの頭を撫でると少女がいる家から出て行った。

しばらくして……

「ん……アレ？……何で私はこんな所に……〔グルル〕ん？……ヒツ!? キャァァア!?」

少女は目が覚めて状況を確認していると近くにいたラルドを見て顔を青くして大声を上げた。

「な、何で！ヴェルディーガーがこんな所に!？」

〔グワァ!〕

〔ヒッ!〕

「おお、どうしたんだラルド？ん？そうなんだ彼女が起きたから呼んでくれたん

だな偉いぞラルド」

ラルドが武昭に嬉しそうに頭を撫でられているのを見た少女は状況が分からなかった。

「えっと、あの……あなたは、一体？……それにここは……」

「おっ悪かったな、俺の名前はタケアキ・トオノって言うんだ、こいつは俺の仲間というか家族のラルドだ」

「グワァ……」

「そうなんですか……私の名前は獣人で茶犬族のカニスと言います……それでここは？」

「ここは廃村だった所だな名前は無いんだ、それよりもカニス、コレを飲んでおけ」

武昭はカニスに小さい木鉢に入った緑色の液体を渡した。

「あ、あの……コレは？……」

「それはカニスの傷を治す薬だ、苦いかもしれないけど全部飲んでくれ」

「は、はい、分かりました……（本当に苦い……）えっ!!」

カニスが武昭に渡された薬を飲むと体中の傷が直ったので驚いていた。

「ど、どうして、あれだけの傷がこんな直ぐに治ったんですか!? この薬は何なんですか!!」

「ん? そいつはヒール草とドローガを調合した薬だぞ?」

「えっ!? ヒール草とドローガって……そんなに貴重な薬草があるんですか!?!」

カニスは薬の原料を聞いて武昭に詰め寄っていた。

「貴重な薬草って……そこら辺に生えてるだろ? ラルド、カニス載せて来てくれ」

「グルウ……ガア……」

「えっと……背中に乗っても良いの?」

カニスが恐る恐るラルドに聞くとラルドが伏せたので静かに乗って、武昭の後についていった。

ラルドの心中

(1)

はい！私は主の行く所なら、どんな場所だろうと行きます！

(2)

ん？何か血の匂いがする……向こうからか、私がいる限り主を危険な目にはあわせる事はしない！

この者は……主ならば助けるだろう

(3)

任せてください主！このラルド！主からの言いつけを守ってみせます！
ん？気が付いたみたいだ！急いで主を呼ばなければ！！

第7話 驚き

武昭とラルドにカニスが連れてこられたのは村の外れだった。

「ほら、ヒール草とドロローガが生息してるだろ？」

「ええーっ!? そんなー! こんなに貴重な薬草がこんなに……まさか貴方が栽培してるんですか?」

「ああ、本当の生息地はここからちょっと離れた場所なんだけど、村の中にあればいつでも使えるからな……ってなあ、カニスこのヒール草とドロローガって、そんなに貴重な薬草なのか?」

「えっ!? 知らないんですか!? ヒール草とドロローガは、その生息地を見つけたら一財産築けると言われてるんですよ!」

「一財産築けるね……んじゃ、その生息地に行ってみるか? ラルド、そこまで乗っけてってくれるか?」

〔ガァッ〕

ラルドは武昭に言われると軽く伏せたので武昭とカニスは背中に乗ってヒール草

とドロローガの生息地に向かった。

「そ、そんな……こんなにヒール草とドロローガが生えてるなんて……」

生息地に到着したカニスは、その場を見て驚いていた。

「それに、こんなに青々としたヒール草とドロローガは初めて見ました……コレを見てください」

「ん？その乾燥してるのはもしかして……【鑑定】」

武昭がカニスが出した物を鑑定すると、こう表示された。

「乾燥させたヒール草とドロローガ。」

天日干しをして乾燥させた物で長持ちはするが効能は生の時の1～5程度に落ちる」

「なるほど、これからすれば生のコレらは貴重な薬草だな」

「ちよっと、待ってください……今、【鑑定】って言いました？」

「ああ、普通にどんな物か鑑定しただけなんだけど」

「普通について……鑑定スキルを持っている人は、この世界でも数えるほどしかないと言われてるんですよ!？」

「え? そうなのか? ……ちょっと俺は寝てるから採りたいなら採ってきて良いぞ(善さん聞こえるなら、ちょっと良いか?)」

武昭はラルドの背中で横になると善に声を掛けた。

《ああ、構わないよ聞きたい事は鑑定と言うか武昭のスキルの事だね?》

善は武昭が何を聞きたいのか分かっていった様でいつのまにか武昭は白い世界にいた。

(そうだけど、カニスの言った事は本当なのか?)

《そうだよ……と言うかその世界でスキルを持つてる者は数少ない存在なんだ》
(そうなんだ……ん? じゃ俺以外にも鑑定のスキル持ちはいるのか?)

《ああ居るんだけど武昭のスキルとはランクが違ってね、武昭が使う【鑑定】は最高ランクの神眼なんだ》

(神眼のランクって……俺が自分で見た時は、そんなの記してなかったぞ)

《ゴメンゴメン、それはこちらのミスだよ、コレはお詫びだよ》

善が手を翳すと2つの光の球が出て武昭の方に向かってきて、そのまま体の中に入ってしまった。

《それは僕の方からの最後のお詫びだよそれで武昭への手助けは終わりだよ》

(そうか……ありがとうな善さん)

《ううん、元はと言えば武昭がそうだったのはコチラの責任だからね、だからここまでしたんだじゃあね》

善が手を振ると武昭は白い世界から消えた。

《コレで私が出来た事はもう無いね……あとは武昭自身が頑張るんだ》

武昭が消えたのを確認すると善も姿を消した。

善と話を終えた武昭が目を覚ますとヒール草とドロージャーを沢山抱えたカニスがい
た。

「ねえ！タケアキ！こんなに採れたよ！！」

「そうか、ちょうど良いから魚でも獲って飯でも食べるかカニスラルドに乗るんだ」

「うん！よいしょっと」

「じゃあ頼むぞラルド」

「グワァ！」

ラルドは2人が乗った事を確認するといつも魚を獲ってる川に向かった。

第8話 壊れた常識?

今回から武昭の表記をタケアキに変更します。

善からスキルについての追加情報を聞いたタケアキは川で魚を獲っていた。

「カニス、これ位で大丈夫か？」

「はい、大丈夫ですって……何で、こんなに捕獲が難しいノワルフィッシュが獲れてるんですか?……もう驚く事に疲れてきました……」

カニスはタケアキがノワルフィッシュを簡単に獲っている事にどこか遠い目をしていた。

「さてと、じゃあ焼いて食べるけど味付けは塩しかないけど良いか？」

「あっ、はい大丈夫です……美味しいっ!何でこんなに美味しいんですか!？」

ノワルフィッシュの塩焼きを食べたカニスは、その味に驚きながらも焼けたそばから食べていった。

「どうやら体も治ってきたみたいだな……」

「例えケガをしててもこれなら幾らでも食べられますよ！」

「まあ、普通に塩を掛けて焼いただけなんだけどな」

「へえ、そうなんですか……ん？今、お塩って言いましたけど、どうやって手に入れてるんですか？」

「手に入れるも何も、ホラあそこに山が見えるだろ？あの山で採取した岩塩なんだ」

「あの山で採取した岩塩ですか……あのーすみませんけど……あの山の名前って知ってますか？」

「ああ鑑定で調べたらゴランド山って言うらしいぞ」

「ゴ、ゴ、ゴランド山……って本当ですか？」

「ああ、そうだけど……どうした？青い顔して」

「知らないんですか!?そのゴランド山があるのはこの世界において踏み込んだ者は必ず命を落とすと言われているタドミールアルナルにあるんですよ!？」

「ふーん、そうなのか……どうりで俺以外の人に会わない訳だ……」

「って！何でそんなに平然としてるんですか!?!早く、ここから出ないと……けど、どうしたら？ラルドです……ヒッ!?!」

カニスが慌てているとラルドが戻って来たがその口にラトローボアを啜っていたので慌ててタケアキの後ろに隠れた。

「おお、ラルドまた獲ってきてくれたのかー偉いぞー」

〔ウガア〕

「ちよ、ちよっと待ってください……これってラトローボアと呼ばれてる生物ですよね?……」

「そうだけど、知ってるのか?」

「ええ……とは言っても私も以前に本で見た事があるだけです……まさか実物を見るなんて……」

「ふーん、ほらラルドも食べて良いぞ魚ならまだあるから」

〔ガウツ〕

ラルドはタケアキから焼き魚を渡されると嬉しそうに食べ始めた。

「ハハハ……ここにいたら私の中の何かが悪くなる様な気がします……」

カニスは自分の状況を確認すると何かを諦めた表情になっていた。

その後、タケアキ達は村に戻るとラトロローボアの処理を始めた。

「よしっと、カニス今日はその前足で夕食を作るから下で受け止めてくれ」

「は、はいっ！分かりました！って重いです!!」

「さてと大体終わったからラルドー」

タケアキは処理を終えて出た内臓をラルドに渡した。

「うーん、今日は何にしようかなあ……そうだラルブディラッシュユがあるから薄切りにして一緒に巻くか」

「えっとタケアキさんって料理が出来るんですか？」

横にいたカニスが料理をしているタケアキを見て疑問に思った事を尋ねた。

「ああ、俺は1人しかいなかったからな」

「アッ……その……すみません……変な事を聞いてしまって……」

「別に気にする事は無いよ今の俺にはラルドがいて、カニスがいるんだから」

「えっ?あの、その……ありがとうございます……」

〔グルル?〕

カニスが照れているとラルドが頭をひねっていた。

「よし、料理も出来たから食べるぞー」

タケアキが言うとカニスとラルドがそばに来て食事を開始した。

第9話 風呂作り（前編）

タケアキの村にカニスが来てから2週間程経った頃……

「そーいや……カニスって何処から来たんだ？」

村の中の家の1つでタケアキは竹で何かを編みながら気になっていた事をカニスに聞いた。

「アッ、話してませんでしたっけ？そうですね……私の村はタドミールから南西の方向にある獣人達が住む村から来たんです……っていか私は飛ばされたんです」

「ん？飛ばされたって、どういう事だ？」

「はい、私の村の近くに古い時代からある遺跡があるんですけど、そこに入り込んだら以前にタケアキさんが私を見つけた所に飛ばされたんです」

「ふーん、そうなのか……っとよしっうん上手く出来たな」

タケアキは話しながら竹籠を完成させていた。

「ふえータケアキさんって器用なんですわねー」

「小さい頃に婆ちゃんから習っててな、こんな所ならコッチの方が使い勝手が良い

から」

「そうですね……ってラルド、またラトローボアを獲って来たんだ」

外を見たカニスは獲物を獲って来たラルドに近寄るとヨシヨシと頭を撫でた。

「カニスもラルドに慣れてきたな」

「それは、そうですねよ……毎日一緒にいるんですからそうだラルド獲物を置いてきてくれる？」

〔ガウツ〕

カニスに言われたラルドは獲物をタケアキ達が決めた場所に置きに向かった。

「それにしても……久し振りに風呂に入りたいなあ……」

「ん？タケアキさん、風呂ってなんですか？」

「え？風呂って、体とかが汚れた時に入ったりする暖かいお湯の事だけど」

「その……暖かいお湯って何ですか？汚れた時は川とかで水浴びすればいいのに……それにお湯は料理する時に使うんですよ？」

「なんだ風呂って知らないのか……じゃあ風呂でも作るか」

タケアキは次にやる事を思いつくと外に出た。

外に出たタケアキは風呂を作ろうと考えてる場所にきた。

ちなみに村は縦2km×横5kmの長方形型の敷地で北を上にして南側に入り口があり、村から北西のグランド山、南東にオネスバブが生息してる竹林がある。

タケアキは村の中心部にある家に居を構えておりカニスはその隣の家、ラルドはタケアキの家横に寢床を作ってもらっている。

北部に保管庫があり獲って来た獲物などを置いている。

それでタケアキがいるのは村の南西部であり、以前は何らかの行事が行われていたと思われていた。

「うん、ここなら大丈夫だな」

「それでタケアキさん、どうやってお風呂という物を作るんですか？」

「まあ簡単に言うと入れ物に水を入れて炎で暖めた物がお風呂なんだ」

「そうなんですか、それでどうやって、その入れ物を作るんですか？」

「それは、こうして【形成】【焼成】 うん、大きさはこんな物だな」

タケアキは目の前に200ℓの白いバスタブを魔法で作り出した。

「これがお風呂なんですか？」

「ああ、これに水を入れて暖めて体や髪を洗ったりするんだ」

「はあ……けど、こんな空の下で入っても……」

「それは心配ないよ【計測】【形成】【焼成】」

タケアキはバスタブを囲う様に魔法で浴室を作り出した。

それは空から見ると【日】の様な形の家で上の部分にバスタブがあり下の部分に

は何も無かった。

「コッチの部屋は何をする場所なんですか？」

「こっちは脱衣所って所でここで服を脱いでからお風呂に入るんだ……っとそうだからカニスに竹で作って欲しい物があるんだけど」

タケアキはカニスにある物を作る様に指示した。

「分かりました、けどタケアキさんは何をするんですか？」

「俺はちょっと探し物があったな……ラルドはカニスのそばにいてやってくれ」

〔グルル……〕

「大丈夫だ、直ぐに帰ってくるから」

タケアキはラルドの頭を撫でると村を出て行った。

第10話 新入りの村民

村を出たタケアキは【百科事典】【方向探知】で目的の物を探し当てていた。

それは見た目がススキの様に細長い葉っぱだった。

「おっ、これが俺の探してた物だな【鑑定】」

「ブリエカラム 原生植物。」

この草を切って絞って出てきた液は石鹼の代わりになる。

これで髪を洗うとツヤが出て体を洗うとカサつき等がなくなる。

因みに洗濯にも使えガンコなシミなども落とせる。」

「これは根っこごと持って行って村でも栽培するか…あとは…：…ん？ 【鑑定】」

タケアキが草を採取していると水溜りに落ちた蜘蛛がもがいていたので助けると近くの木に載せた。

「サルトレーラーニヨ 原生生物。」

蜘蛛の一種。これが出す糸で作る布は丈夫で長持ちする。」

「そうなんだ…：…まあ、今度は落ちるなよ、それじゃあな」

タケアキはその場から離れたが蜘蛛はジッとその背中を見ていた。

村に帰る途中タケアキはある事を思い出した。

「そういや善さんに新しく貰ったスキルの確認をしてなかったか【ステータスオーブン】どれどれ」

タケアキがステータスを見ると空白の場所に新たなスキルが記されていた。

【アイテムBOX】New！

自分がしまいたい物などを入れて運ぶ事が出来る。

容量は無量大。中に入れた物は時間経過がしなくなる。

動物は収納不可だが死体は収納可能。

【○○収納】と唱えると収納でき【○○開放】と唱えると中から出せる。

【ソート確認】と唱えるとBOXの中を確認出来る。

【グラスバオー種苗農夫】New！

自分が欲しいと思う野菜や果物を作る事が出来る。

農家のスキル持ちが使う場合成長を促進する事が出来る。

「なるほど……アイテムBOXの方はゲームとかでよく見るスキルだな……そしてもう一つのスキルだけど、村でやって見るか……」

そうだ【ブリエカルム収納】おおっ

タケアキがスキルを使うと目の前にあったブリエカルムが消えた。

「そして、【ソート確認】ふーん、こうなるのか」

そう言うのと目の前にこんな物が現れた。

〈ブリエカルム 10束〉

「出してみるか【ブリエカルム開放】おっ出て来たかそしてこうなると〈ブリエカルム 0〉」

タケアキはスキル確認するとブリエカルムをBOXの中に入れた。

「けど……【ブリエカルム 1束開放】やっぱりな……〈ブリエカルム 9束〉」

「さてと、これがあるなら、もうちょっと採っていくか」

タケアキはスキルの確認を終えると近くにあった色々な物を採取して行った。

村にタケアキが戻るとカニスがラルドと共に出迎えた。

「よっ、帰ってきたぞ」

「お帰りなさ……ん？タケアキさん、その肩に居るのって……蜘蛛ですか？」
出迎えたカニスはタケアキの肩に蜘蛛が居る事に気付いた。

「ん？蜘蛛って……おおっ、もしかしてお前って俺が助けた蜘蛛か？」

タケアキが聞くと蜘蛛が前足をシュタツと上げて返事をした。

「俺についてくるよりも仲間たちと一緒にいた方が良かったんじゃないか……つて、へえ……」

タケアキが言うると蜘蛛が移動して衣服の穴があつた場所を自身の糸で直した。

「もしかして俺が助けたからお礼をしに来たって事で良いのか？」

「シュバツ！ワサワサ」へ1

「そうか、ならこれからはお前もこの村の新たな住人だラルドとカニスも仲良く

してやってくれ」

〔ウガア〕（1）

「よろしくね蜘蛛さん……ん？（もしかして、この蜘蛛って……うん何も考えない事にしよう）」

カニスは蜘蛛を見て何かに気付いたが気にする事をやめた。

蜘蛛の心中

〔1〕はい！私は助けてくれたあなたに受けた恩を返しにきました！
ラルドの心中

（1）まあ、互いに主に助けられた者同士仲良くしよう。

第11話 つまみ食い

タケアキが村に戻るとカニスがタケアキを連れて何処かに向かった。

到着したのは浴室で中に入ると竹籠や竹のスノコが出来ていた。

「おお、俺が頼んでた物が出来たのか」

「うん、私だけじゃなくてラルドにも手伝ってもらったけど」

「そうか、よくやってくれたな、ありがとうなカニス、ラルド」

タケアキに頭を撫でられたカニスとラルドは嬉しそうにしていた。

「さてと、これが出来たなら次は……そうだ、お前って言うのもなんだからパルトって呼んでも良いか？」

タケアキが肩にいた蜘蛛に聞くと足を上げて了承した。

「そうか、ありがとうなパルト、それでパルトに作って欲しい物があるんだけど……
こういう形でこんな風な奴なんだけど……？急がなくて良いから」

へパシユツ！

タケアキがパルトを地面に下ろして枝で絵を描いてどの様な物か説明すると理解

し糸を出して作り始めたのを止めた。

「おっと、ここじゃ汚れるから……うん、あの家で作ってもらうか」

タケアキはパルトを手に載せると近くの家に運んだ。

パルトに何かを頼んだタケアキはカニスと一緒に竹である物を作っていた。

「よしっ……カニス、手を離して良いぞ」

「うん、タケアキ、コレって椅子？何か長いけど」

「椅子は椅子でもベンチって奴だようん座っても大丈夫だな」

「うわあ、本当だあ……」

2人はベンチに座って感触を確かめていた。

「竹だから長持ちもするんだぞ……こうなってくると……あっ、そうだ」

タケアキは立ち上がると村の中にある元は何かを育てていたと思われる場所に向かったのでカニスも付いていった。

「ねえ、タケアキ、こんな所に来て何するの？」

「うん、ちょっと試したい事があってな……【種苗農夫】……ん？（何も出ない？……そうか何を作るか決めないと……じゃあ【トマト】）」

「うわっ!?!なんで急に芽が生えて来たの!?!ってすごい速さで成長してるよ!?!」
タケアキがスキルを確かめる為にトマトを作ろうとしたら直ぐに芽が生えると同時にそのまま成長すると実がなった。

「うわぁ……ねえコレもタケアキのスキルなの？」

「まあ、そうだな……出来れば先に支えを作れば良かったな……カニス、この赤い実を収穫しといてくれ、俺は竹を持ってくるから」

「うん、分かったよ」

タケアキは竹を取りに行きカニスはトマトを収穫し始めた。

「うんしょ……つと、コレってマトマだと思っけど私が見た事ある奴とはちょっと違う様なぁ……ヘクキュ〜あう……一個位……大丈夫……だよね?……」

カニスは収穫してる時にお腹が鳴ったので周りを見て気付かれないように食べた。

「あーんへカシユツゝえっ!? コレって本当にマトマなの!? 私が以前食べた物よりも皮が柔らかくて味が甘い!!」

「ん? なんだカニス、先に食べてたのか?」

背後からタケアキに声を掛けられたカニスは驚いた。

「アッ! その、あの……………ごめんなさい……………」

カニスは観念すると謝ったがその表情は泣きそうだった。

「カニス、味はどうだった?」

「え? 黙って食べたのに……………怒らないの?……………」

「カニスは自分で悪い事をしたって分かっているんだろ? それにちゃんと謝ったじゃないか……………だから怒らないよ」

タケアキが優しく抱き寄せるとカニスは胸の中で泣いていたが、それ以上タケアキは何も言わなかった。

第12話 風呂作り（後編）

カニスは泣き止むと顔を赤くしてタケアキから離れた。

「そ、それにしてもタケアキさんって凄い魔法が使えるんですね、どこで習ったんですか？」

「ああ……それに關しては、また今度話すよ、それよりも……へガウツン？ラルドどうしたんだ……って、そこにパルトがいるって事は……俺が頼んだ物が出来たのか？」

へシュバツ！クイクイ

タケアキがカニスからの質問をいなしているとラルドが背中にパルトを乗せてきたので聞くと品物が出来たので来てくれとの事だった。

それから……

「うわぁ……まさか、こんなに早く、しかもキレイに出来るなんて……凄いなパルト」

「タケアキさん、この布地って何ですか？」

パルトの小屋に行くと数枚の白い大きめの長方形の布とそれを均等に縮小させた布がテーブルに置かれていた。

「そうか……カニスは風呂を知らなかったからコレも知らないのか……この大きい方はバスタオルって言って風呂から上がった時に体を拭く奴で小さい方はタオルで風呂を入っている時に顔を洗ったり拭いたりする奴なんだ」

「へえ、そうなんですか……私達は水浴びをしたら乾くまで待つから、こんな物は使わないんですよもしくはそのまま着てきた服を着ます」

「なるほど……じゃ俺が使い方を教えるから……って、まずは風呂に水を入れな
いとな……【水球】」

タケアキは水の球を作ると、それを湯船に入れ適量になるまで貯めた。

「うん、これ位で大丈夫か……次は【火球】……あまり熱くすると入れないから……
【計測】……よし、これなら暫く冷めないな」

水を貯めたタケアキは火の球を作ると水に入れてお湯を沸かした。

「これがお湯なんですか……キャッ!? 熱っ!!」

「沸かしたばかりだから熱いぞ……じゃあ、やり方を説明するけど……その前に

【ブリエカルム1束開放】

「タケアキさん、この草って何ですか？」

「ああ、こいつを絞って出た液は石鹸の代わりになるんだ……カニスはこれを細かく刻んでくれ俺はパルトの所に行ってくるから」

「はい、分かりました」

タケアキはカニスに作業を頼むとパルトの所に向かった。

少しして戻ってきたタケアキは一枚の布と木で作ったボウルと筒を幾つか持ってきた。

「タケアキさん、これ位で良いですか？」

「ああ、良い感じだ次は切った草をこの布に包んで……それで絞って……」

「うわあ……何かヌルヌルした物が出てきてますけど……」

「カニス、この溜まった液をこの筒に入れてくれ」

カニスはタケアキが絞った草汁を筒の中に入れた。

それからタケアキとカニスは液を絞っては筒に入れる作業を繰り返した。

「1束だけど結構な量がある物だな……全部で10本かほらカニスは5本だ」

「あっ、ありがとうございます……それで、この液ってどう使うんですか？」

「まあ風呂に入った時に髪の毛や体を洗ったりする時に使うんだあとは衣服を洗うのにも使えるみたいだし」

「え？これって、そういう物なんですか？」

「そうだぞ……って、カニス達は服が汚れた時はどうしてたんだ？」

「川とかに持って行って棒で叩いて落とすんです」

「ふーん、そうなのか……（確か昔の日本でも、そんな風にしてたって聞いた事はあるな……）」

タケアキはこの世界と元の世界との違いを感じていた。

「ああ、そうだ風呂に入る前にカニスに幾つか教えておくけど……」

タケアキはお風呂の入り方を教えていた。

第13話 入浴

タケアキから説明を聞いたカニスはタケアキから聞いていたお風呂の入り方をしていた。

「えっと……まずは、この湯船って物に入る前にはお湯が汚れるから軽く体を洗ってからって……」シャカシャカモフモフ

カニスはタオルに液体をつけて泡立てると体を洗い始めた。

「ウワツ！すぐく黒い泡が……エツ!?体から何かが……」

カニスは洗った泡に色が付いてて肌から垢が出て来る事に驚いていた。

「コレがタケアキの言っていた私の体の汚れなんですネ……川とかで綺麗にしてたと思っただけど結構……」コシコシ

「ヒヤツ！髪の毛も始めて洗ってみましたけど……何か気持ちいいです……」バシャーッ

「ハフウ……コレがお風呂って物なんですネ……凄くホッコリします」
「バウッ！」

「キヤッ!? って……ラルド? 何でここにいるの?」

カニスが頭と体を洗って湯船に浸かってホッコリしていると鳴き声がしたので尻尾を振ってるラルドがいた。

「何で、ここに……もしかして私が溺れない様に心配してくれたの?」

「ワウッ!」フリフリ

「そっか、ありがとうねラルド……ん? ラルドも結構汚れてるね……そうだ、私が洗ってあげる」

カニスは湯船から出るとラルドの体を洗い始めた。

その後……

「おっ、カニスも上がったのか、どうだったって……聞くまでも無いみたいだな」

「とても気持ち良かったです」

タケアキが風呂上がりにベンチで休んでるとラルドの背中に乗せられた湯上がりのカニスがそばに来た。

「ほらラルドから降りて、ここで休んでろ。ありがとうなラルド、カニスを手連れてきてくれて」

「バウツ！」フリフリ

カニスはタケアキの横に座らせられラルドは頭を撫でられて喜んでいた。

「風呂上がりは喉が渴くからコレを飲むと良いぞ」

「はい、ありがとうございます……って、コレって何かの血ですか？」

カニスはタケアキから竹コップを渡され中を確認すると赤い液体だった。

「いや、こいつはマトマを潰した奴に多少の塩を入れた奴だ。試しに飲んでみる」

「分かりました……へゴクッ……んっ!?へゴクッゴクッ!ふう……凄く美味しいです！」

「喉が渴くし汗をかいてるから、ちょうどいいんだよ」

「そうだったんですか……あっ……あの……もう一杯……良いですか？」

「ああ、構わないぞ ホラ」

カニスは照れながらお代わりを言ったがタケアキは構う事無くお代わりのジュースを渡した。

「フハァ〜美味しいです〜タケアキは何をしてたんですか？」

「ああ、夜空を見てたんだよ……」

「ふえ〜……そう言えば、こうやってユックリと夜空を見た事は初めてです……ク
シユン

「ハハハ、このままなら湯冷めするからもう寝るか、カニスの部屋はそこだからな
じゃあな」

2人は、それぞれの家に入ると眠りについた。

第14話 2人目の住民

カニスがタケアキの村に来てから数日経って……

「ふう……こっちはこれ位で大丈夫だな……」

「タケアキ、私の方は作業が終わりましたけど、次は何をしますか？」

タケアキとカニスは野菜の収穫や動物の捕獲など様々な作業をしていた。

「それにしてもカニスも大分、ここの生活に慣れてきたな」

「ええ、慣れないと生活するのが難しいですから……」

カニスは遠い目をしていた。

「まあ、カニスがそう言うなら俺は構わないけど……〔ガウッ！〕ん？今のはラルドの声だな」

「何かあったんでしょうか？」

2人はラルドの声が聞こえたのでその場に行くとき背中の中程までのストレッチの長さの金髪でスタイルが良い耳の長い女性がラルドに背中から乗られていた。

「ラルド、この女性はどうしたんだ？」

「アツ、タケアキ、これを見てください」

カニスが何かを見つけたので見ると壊れた弓矢が落ちていて、その周りにはマトマの幾つかが潰れて落ちていた。

「あー……ラルド、もしかしてこの女性はマトマを盗もうとしてたのか？」

〔ガウツ！〕尻尾フリフリ

「ん……アツ！見つかってしまいました!!」

ラルドが喜んでると下にいた女性が目を覚ました。

「あわわわ……申し訳ありませんでした!!」

女性は2人に気がつくとラルドの足元から抜け出して青い顔で土下座をした。

「いや、特に何かをするって訳じゃないんだけど……アンタは誰なんだ？」

「えっと、あの、その……クキユ〜ハッ〜」

「ハハハ、腹が空いてるみたいだな、カニス俺は何か作るからこの人をお風呂に連れて行ってくれ」

「はい、分かりました、さあこちらに来てください」

「えっ？、あの、その、お風呂とは一体？……」

女性は何かを疑問に思ったが、頭を捻りながらカニスにお風呂場に連れて行かれた。

暫くして……

「うん、取り敢えずはこれ位で良いかな」

「タケアキ、彼女を連れてきましたよ」

タケアキが料理を作り終えると同時にカニスが女性を連れて戻ってきたが……

「フヘエ……あの様に沢山の暖かいお湯と呼ばれる物を使いましたがとても気持ち良かったですよ」

風呂から出た女性は肩までの真っ直ぐな金髪に細長い耳で出る所は出て引っ込んでる所は引っ込んでいるスタイルの良さだった。

「まあ、気に入ってくれて良かったよ、なら冷めない内に食べようか」

タケアキが言うとそれぞれが空いている場所に座って食事を始めた。

「ハグハグハグ！こんな料理は初めて食べました！」

「口にあって良かったよ……それよりも、なんでこんな場所に居たんだけ？」

タケアキがそう言うのと女性は食事を一時中断した。

「はい……私の名前はミンテと言います。私がここにいたのはある物を探してるからです」

「ミンテさん、そのある物って何ですか？」

「ああ、俺達もそれなりにこの辺りは詳しいから何か手伝えるかもしれない」

「ありがとうございます……ですが、それは難しいと思います……私が探してるのはドローガとヒール草と言う2つの葉草なんですから……」

「え？」

ミンテの言葉を聞いたタケアキとカニスはお互いに顔を見合わせた。

「えっと……ミンテ、そのドローガとヒール草なんだが……ここにあるんだ」

「えっ？……コレは……本当にドローガとヒール草です……それに今、どこから出したんですか？」

「ん？普通にアイテムBOXから出したただけだぞ？」

「なっ!? アイテムBOXって、あの伝説のスキルじゃないですか!!」

「え? そうなのか、カニス」

「うーん、私はスキル持ちがいるってだけで凄って聞いた事があるだけですから」「なんだろう……何かこの人達と私の間に考え方の違いがあるみたいですね……」

ミンテは2人の言葉を聞いて頭を抱えていた。

「それよりも、ほれ、ミンテはどれだけ必要なんだ?」

「え? えっと、私は1束ずつ有れば問題ないです……ですが、これの代金を支払おうにも……持ち合わせが……」

「いや、別に代金なんか要らないぞ? こんなものそこら辺に群生してるから」

「ええ、タケアキさんの言う通りですから」

「ですが……え? 群生してるって……はい、分かりましたアナタ達と私を同じに考えてはダメだと言う事に、では、ありがたく頂いていきます」

「そうだ、もし用事が終わったならココに来たら良いぞ、見ての通り村人が少ないから」

「分かりました、今度ここに来る時はちゃんと用意をしてから来ます、それでは」

「ラルド、ミンテを安全な所まで連れて行ってくれ」　〔ガウツ〕

「ラルドって言うんですか、すみませんけどお願いします」

ミンテはラルドの案内で安全な所に向かった。

それから数日後、軽く荷物を持ったミンテが新たな村の住人となった。

第15話 主食探し。

ミンテがタケアキの村の住民になってある日の事……

「はあ……やっぱり、足りないな……」

食事を取っていたタケアキがポロっとこぼした言葉を2人が聞いていた。

「タケアキ、何が足りないんですか？」

「ああ、この様な場所でこれ程の生活が出来てるでは無いか」

「そうなんだけど、どうしても『主食』が無いとな」

タケアキの言葉に2人は首を捻って尋ねた。

「えっと、主食って何ですか？」

「え？ 主食って……ほら、米にパンとかパスタみたいな物だけど？」

「ああ……確かに人間達は食事の時にその様な物を食べてるとは聞いた事がありますが」

「じゃあ2人は食事の時は何を食べてるんだ？」

「私がいた村では森などで採取した果物や野菜、捕獲した動物などです」

「我らエルフも同じ様な物です」

「そうか、ならパンとかライスとかは食べてないのか……」

タケアキの言った単語に2人は再度頭を捻った。

「よし、なら、今度は何か主食を探すか」

「あのータケアキが言う主食とは何なのですか？」

「ああ、ライスは稲って言う植物から採れてパンやパスタは小麦って言う植物を色々と処理して作るんだ」

タケアキので説明に2人はフーンと納得した表情を見せた。

食事を終えたタケアキは軽く周りを見回した。

「久し振りに使うか……【百科事典】【方向探知】探すのはやっぱり……稲！」

タケアキがスキルを唱えると頭の中に地図が現れてそれと同時にある方向を向いた矢印と地図の一部が青くなっていた。

「なるほど稲が群生してるのは、この辺りって事か……距離は【計測】」

地図の青くなつた所を頭中で示すと今いる場所からの距離が浮かんだ。

「かなりの距離があるな……なあ、2人に聞くけどこの場所から向こうの方には何があるか知ってるか？」

タケアキは頭中に浮かんだ矢印の方を指差すと2人に尋ねた。

「確か……向こうの方には古代遺跡があると旅をしてた時に聞いた事があります」

「私も、その話は知ってます、その遺跡には古の宝物の言い伝えもあつた筈です」

「宝物の言い伝えね……まあ俺はそんな物よりも稲が手に入れば良いんだけどな」

「そうなんですか……まあこの村にいたら、そう思うわよね」

ミンテの言葉にカニスは苦笑いを浮かべていた。

「距離があるから今はまだいいか……じゃあ【百科事典】【方向探知】小麦……ん？結構近くにあるんだな【計測】」

「え？そうなんですか？」

「ああ、調べたらその山の麓にあるみたいだ」

「へえ、タケアキの持つてるスキルって結構便利なのね」

「まあ、生活するのに不便は無いな」

「それでタケアキは、その主食を取りに行くんですか？」

「それは当然だ、せっかく見つけたんなら取りに行かないとな、それで2人はどうするんだ？」

「私はラルドと一緒に村に残ります。少し作業が残ってるで」

「じゃあ私と一緒に行くわ、古代遺跡が見つかるかもしれないから」

「じゃあ行ってくる。ラルド、カニスの事を頼んだぞ？」

タケアキはミンテと行きカニスはラルドと村に残る事になってラルドの頭を撫でると嬉しそうにガウと鳴いた。

異世界転生したのは世界のVIP達から認められた料理屋の店主

著者 北方守護

発行日 2024年2月23日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/236689/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。